

# 多文化共生の視点による国際理解・国際交流活動の取組

## ～FSAとしての実践報告2～

Intercultural Exchange and Communication Initiatives from the Perspective of Multicultural Coexistence —As Told by a Foreign Student Adviser Part 2—

渡 邊 優 生\*

Yuuki WATANABE

### Abstract

In order for foreign students in Japan to be able to enjoy productive study and personal life and avoid what is known as *social loneliness*, it is necessary for them to be able to maintain their own identities, whilst at the same time feeling accepted by Japanese society and the local community. In order to escape from conditions of *emotional loneliness*, it is necessary for them to be able to secure meaningful friendships that transcend cultural differences in order to share both good times and periods of loneliness and hardship. In this paper, I will discuss some initiatives taken at Suzuka International University that allow exchange students to engage in meaningful cultural exchange activities and overcome such social conditions. Results obtained from questionnaires given to participants in both the "Student Regional Dispatch Program" and the "International Club" will be analyzed from a multicultural coexistence perspective in order to identify which dimensions of these exchanges proved valuable to students, the university and the local community. These results will then be utilized to offer a new vision of intercultural exchange and suggest issues for further research.

Keywords: alleviation of social loneliness, emotional loneliness, international exchange and communication activities, multicultural coexistence, foreign student advisor (FSA)

### 1. はじめに

留学生と話をすると「地域の人に母国の文化や習慣を伝えたい」とよく聞かすが、その背景には、慣れない異文化環境のなかでの孤独感があるように感じる。つまり、地域の人との交流により自己のアイデンティティを確認し、日本社会、若しくは地域社会に自分が受け入れられているという安心感を得ることが *Social Loneliness*（社会的孤独）を克服する多文化適応のための一つの戦略となることに気が付いているからであろう。留学生が異なる文化、習慣、言語、社会制度に適応し、充実した留学生活を送れるよう、この *Social Loneliness* の解消に向けた取り組みが留学生を受け入れる大学と FSA<sup>(1)</sup>に求められる。アルセン<sup>(2)</sup>は、「

\*本学専任職員、留学生教育交流（Foreign Student Affairs）

大学全体や地域の人々をも対象とした異文化理解の促進は、FSA の職務から切り離すことができない重要な仕事であり、受け入れ国側の人々の留学生に対する接し方や態度に深く関与していくべきである」という。しかし、ここで重要なことは、FSA がこの留学生と地域との係り合いが単なる国際交流ではなく、多文化共生の視点に立った、より双方向的で互恵的なものでなければならないことを理解することであろう。つまり留学生の *Social Loneliness* の克服という地域との交流を促す一つの動機を最大限に活用し、地域、大学、そして留学生自身により価値ある効果を生み出せるよう、企画、調整し、またそれを地域に情報発信することで、さらなる地域と留学生との交流が循環、促進されるようコーディネーター・ファシリテーターとしての役割を果たさなければならない。本稿では、筆者がFSAの業務として2004年～2008年に担当した「学生地域派遣事業」と、2004年から現在まで指導員を務めている「国際交流クラブ」による活動のいくつかをこれらの実践例として報告するとともに、今後に向けた課題と新たな展開を考察する。

## 2. 学生地域派遣事業

### (1) 過去の派遣内容と派遣学生数

「学生地域派遣事業」は、本学に在学する留学生、又は海外留学等を経験した国際感覚の豊かな日本人学生が、地域（教育機関、地域国際交流団体、自治会等）に行き、母国（外国）の言葉や文化・習慣などを伝えたり、母国（外国）の料理を一緒に作ったりと、様々な内容で活動を行うものである（表1）。2001年に事業を開始して以来、派遣依頼先件数、派遣学生数は年々増加し、筆者が担当した5年間では、幼稚園・小学校・中学校・高校、そして地域国際交流団体等に329件、726人の学生を派遣した。しかし、依頼が増加するなかで、事務負担と運営経費が増大したため、2006年には、派遣先1件につき、1年以内2回のみ、上限原則4名までと条件を加えた。そのため2004年に84件175人、2005年に90件224人の学生を派遣したが、2006年には、54件121人、2007年に48件106人、2008年に53件100人と減少している。なお2005年は、財団法人中島記念国際交流財団「平成17年度留学生地域交流事業」に採択され、ご支援を頂いたことでより多くの学生を派遣することができた（表2）。なお「5年間の派遣依頼件数」では地域が115件（35%）と一番多く、その次に小学校93件（28%）、高校70件（21%）、幼稚園30件（9%）、中学校21件（7%）となっている（表3）。また「5年間の派遣学生数と出身国」は、中国が1番多く、以下に韓国、日本、ウクライナ、アメリカ、インドネシアと続いている。中国と韓国が特に多いのは、本学が受け入れている留学生出身国の上位に即しており、その次の日本については、本事業を留学生だけではなく、日本人学生の参加も強く促した結果が表れている（表4）。また5年間の派遣依頼件数の推移は、地域と高校への派遣が増加しているのに対して、小学校と幼稚園が減少している（表5）。また中学校においては、依頼がほとんどなく、これについて近隣中学校の教員に尋ねてみたところ、国際交流に対して関心のある教員が少なく、またそのような時間が現実的に作れないとのことであった。小学校と高校とで比較的話、国際交流に関する活動が多く実施されているなか、もしそれが本当なら非常に残念であり、機会があればその原因を調査したい。

### (2) 派遣先からの活動報告（アンケート調査集計）

派遣先での活動終了後に実施した、派遣先へのアンケート調査（活動報告）を、それぞれ「幼稚園」「小学

校・中学校」「高校」「地域（地域国際交流団体や自治体等）」に区別して集計した。満足度では「期待以上」「期待通り」「普通」「あまり良くない」「期待外れ」の5つの項目からの選択方式で、これによると「期待以上」「期待通り」がほとんどを占め、非常に高い評価を得ていることが分かる（表6）。さらに本事業に対するより具体的なコメントを得るため「良かった点」（表7）「悪かった点」（表8）について記入して頂いた。「良かった点」からは、外国の文化や言葉、料理などを、直接その国の留学生から聞くことで、国際交流・国際理解をより現実的に親しみを感じながら深めていくことができたことが分かる。またどの派遣先も留学生の日本語の堪能さに感心されている。このようなボランティア活動に興味ある学生は、比較的に明るくて社交的な性格の持ち主が多い。また本学の留学生は個人差もあるが比較的高い日本語能力を有しているため、日常におけるコミュニケーションにおいてほぼ問題がない。このことは、留学生をよく知らない人にとっては、自己の外国人に対するステレオタイプとの違いに、自然な驚きと素直なうれしさを感じるのであろう。またこの活動に多く参加しているベテランの学生は、クイズやゲームを取り入れた誰もが気軽に楽しめるような工夫を凝らし、なかには特技の民族舞踊や歌の披露をするなど参加者の心を魅了する。その結果、次第に留学生に対する親近感と、関心が生まれ留学生への理解がより深まるようだ。さらに派遣する学生は、何も留学生だけとは限らず、留学経験のある日本人学生も積極的に活動に参加できるように、派遣先の協力と理解をもとに促した。その結果、ある高校からは、「身近な海外経験者としての日本人学生の参加が、留学生と高校生との交流の架け橋となり、うまく融合し生徒達は活動に自然に引き込まれていくことができた」と高い評価を得ている。

### (3) 学生地域派遣事業に参加した学生の感想から

本事業に参加した学生の感想（表9）や、普段の会話から共通して感じることは、どの学生も普段の大学の授業では学べない経験が得られることに大きなやりがいを感じている。しかし活動は、常に成功するとは限らず、必要な資料を一生懸命準備し、上手く説明できるように日本語を練習したにもかかわらず、当日に派遣先の学生が真面目に聞いてくれなかったと失望して帰ってくる学生も多い。それも一つの経験とFSAや他の教職員に励まされアドバイスを受けながら、次の機会にはもっと聞いてもらえるように工夫を行う。その努力の積み重ねが実を結び、派遣先の学生が熱心に聞いてくれたり、積極的に質問をしてくれたりすれば、それに大きな喜びや充実感を感じ、次第にこの活動の魅力に引き込まれていくようだ。留学生は、日本の習慣や感覚の違いに戸惑うことも多いが「もっと日本人の文化や普段の生活を知りたい」とその違いを受け入れ、逆に自分の文化を日本人が理解してくれるように伝える努力もしている。こうして幅広い年代、様々な職業の人と知り合い、人前で話す度胸とスキルを磨き、新しい自分を発見し、広い視野で物事を見る力を養う。さらには、自分の将来の進路を見出す学生もいる。また母国を紹介するためには、母国について学ぶ必要があると感じることが多いようで、特に日本人学生は、留学生が母国について上手に話すのを見て、自分はあるように日本のことを外国人にきちんと伝えられるのかと不安を感じ、海外に目を向ける以前に母国や自分の生まれ育った地域のことを知らなければならないことに気が付くことが多い。

### (4) 今後の発展と課題

以上のように、Social Lonelinessの克服という留学生の地域との交流を促す動機を活用した「学生地域派遣

事業」が、地域の「国際理解」「留学生理解」の促進に貢献できていることが分かる。また留学生自身の「日本理解・地域理解」、そして国際人としての広い視野と人前での発言力など「豊かな人間性」を身につける教育的効果も生み出しているようにみえる。さらに大学にとっては、学生への実践的な教育の場の提供と地域の大学に対する好感度の向上、さらに高校等教育機関での活動による学生同士の直接的な交流が、将来の学生募集に繋がっていくことも期待されるだろう。導入部で先述したとおり、FSA は、本事業による学生の活動から、それぞれの関係組織やコミュニティーに派生する効果を把握して、より効果的、そして価値ある成果を得ることができるように、コーディネーター・ファシリテーターとしての役割を努めなければならない。例えば、高校から留学生に自国の文化紹介や、留学で苦労したこと、学んだことなどを講演して欲しいという依頼がよくあるが、このような時はたいへい、逆に高校生も「自分の学校のこと」「住んでいる地域のこと」など、留学生に向けて発表してくれるようお願いすることが多い。即ち留学生の話をただ聞くこともよい経験で勉強になるが、実際に高校生自身が自分自身のことについて話す立場になると、それが意外に難しいことだと気が付くことに繋がる。そして、その気づきが、発表する側の気持ちや苦労を理解し、聞く姿勢を培うことになり、より効果的な教育の現場へと変化するのである。これはあくまでも一つの例えであるが、実は双方向的な国際交流を生み出すための基本的なポイントであり、意外に抜け落ちていることが多い。

最後に、その他のプログラム自体の諸課題については、アンケート調査「悪かった点」(表8)「その他のご意見・感想等」(表10)等の意見を参考に、年度末には反省会を持ち、改善できる点については次年度にむけて活かせる様に取り組んできた。一つ目は、安定した学生派遣の確保についての問題で、学生は授業が優先されるため、派遣先の要望に全て答えていくことが現実的に難しく、活動事前の打ち合わせの時間が十分に作れないことや、年に数回は、どうしても学生が見つからず、派遣自体をお断りしなければならないケースもあった。また留学生の経験不足による活動内容や進行方法への不満などもいくつか指摘された。これらの問題への対応としては、学内で本事業の意義や活動方法などを指導する研修会等を実施し、ボランティアに対する興味と参加意識を啓発することで参加学生の増員を図った。また派遣時にはベテランの先輩に、後輩を同伴させて、活動のノウハウを学習してもらえるように気を配った。こうして経験を積んだ学生が、後輩に教えていく。そのような毎年の地道な下準備が、現在の多くの派遣依頼に答えることのできる底力になったと思う。二つ目は事務手続きの能率化についての課題で、特に初めて学生派遣を依頼する機関から、申し込みのための手続き方法や、全体の流れが掴みにくいとの意見を頂いた。そこで申し込みから活動日までの流れをフローチャート化して、ご案内することで派遣先とスムーズなやり取りが実現できるようになった。また日本語が堪能な留学生ではあっても、集合時間などの聞き間違いが何度かあったため、打ち合わせ終了時にリマインダー(活動日時・当日の集合場所・当日の交通手段・派遣先の緊急連絡先などの覚書)を派遣する学生に書いてもらうことでほぼ解決することができた。またこれが大学に届くことで、問題なく派遣先と学生のやり取りが進んでいることをFSAが確認できるという役割も果たしている。さらに毎月、多数の派遣依頼を頂くなかで、他の業務との兼ね合い、全ての調整を担うことは現実として難しくなってきた。そこで学生の紹介後は、基本的にFSAが派遣先と学生との間に仲介せず、直接やりとりをしてもらうをお願いしている。もちろん分からないことやトラブルの発生、またスムーズにやり取りが進まない場合は、FSAがアドバイ

スやフォローをして完全に投げ渡すことは無い。一般的に見て、学生とのやり取りを積極的に行った派遣先は、留学生の性格や特技も良く把握でき、信頼関係を築くことでより充実した有意義な活動に発展することが多かったようだ。このような方法でより能率的に多くの派遣依頼に答えるためにも、このフローチャートとリマインダーが非常に有効的に働いた。三つ目は事業に係る経費の問題で、派遣依頼数が増加するとともに、留学生に支給する活動準備費等の負担が大きくなり、派遣回数を派遣先1件につき、原則として1年に2回までと制限を加えた。そのため派遣先からは、それ以上の派遣要望が多く聞かれるようになる。これには、あくまでもこの制度を原則と捉え、是非にとの要望があれば柔軟に対応することにした。そのうえで、派遣先による留学生の活動準備金の全額支給または大学と折半できるか否かを申請用紙に記入してもらう欄を設けている。さらに留学生交流推進を目的とした助成事業等いくつか応募し、平成17年度には「財団法人中島記念国際交流財団助成による平成17年度留学生地域交流事業」に採択、また日本私立学校振興・共済事業団が交付する「平成20年度私立大学等経常費補助金特別補助」の一つの補助項目に採択された。これらの結果、派遣件数、派遣学生数は前年度に比べ大きく減少したが、大学が負担する必要経費は多少削減することに繋がった。しかし今後も活動が長期的に続けられていくよう、地域やさまざまな機関のご理解とご支援を頂きながら対策を考えていく必要があるだろう。最後に教育的課題として、今後は学生が地域貢献を通して主体的に自己啓発を促すための「教育の場」としての位置づけをさらに定着させることが大切だと考えている。つまり派遣学生が本学で学ぶ国際学の専門性と国際経験を生かしながら、地域との交流・協働の中で、責任感、自立心、愛国心、多文化尊敬の念、創造力、コミュニケーション能力等を高め、特に留学生は日本社会の理解向上、友情の芽生えによる留学生生活の充実など「豊かな人間性の育成」の具現化をより目指す。具体的にはその日限りの満足に終始させず、活動経験から得た様々な成果をレポートにまとめ、発表させることで一連の学習としての認識づけを強化する。また、派遣先にアンケート調査を継続して行い、フィードバックしながら教育効果をはかりたい。また本学は日本人学生を対象とした海外留学支援制度と、提携大学等から留学生を誘致する短期日本文化研究制度を実施しているが、これにより以前、海外留学支援制度を利用して留学先で出会った友人と、帰国後に本学の短期日本文化研究制度を利用して留学してきたその友人と、今度は日本で共に学ぶようなことも可能になった。よって、これら2つの事業との連動と体系化を積極的に目指し、その学びの成果を地域交流の中で生かすことでより今後一層の教育的成果が期待されるだろう。さらには本事業に対する地域からの評価に繋げられる取り組みを積極的に行いたい。具体的には、学生のレポート、アンケート調査、教育的効果等についてまとめた報告書を作成して地域に公表すること、そして本事業に参加した学生がその活動を発表する「国際理解・国際交流活動発表会」の企画である。この発表会では、地域の国際交流団体、教育機関の生徒、地域在住外国人にも参加を促し、日常の国際交流・多文化共生に関する活動等を発表する。また聴衆者も様々な活動や情報・意見を聞くことで、国際交流に対する興味とより幅広い視野を身に着けられ、地域国際交流の情報交換のよい機会となることを期待している。そして2007年に第一回目の発表会が、教育委員会、国際協力・国際交流団体等から後援・協力を頂きながら小学生から高校生、大学生、そして地域の国際交流に携わる方を発表者に迎えて実施することができた。尚、この発表会においても「財団法人中島記念国際交流財団助成による平成19年度留学生地域交流事業」に採択され、ご支援を頂くことができた。

### 3. 多文化共生を目指した国際交流クラブ

#### (1) 国際交流クラブの概要

留学生にとって地域の人との交流により自己のアイデンティティを確認し、日本社会、若しくは地域社会に自分が受け入れられているという安心感を獲得することが **Social Loneliness** (社会的孤独) を克服する多文化適応のための一つの戦略となる。その取り組みとして「学生地域派遣事業」における実践をまとめたが、このような活動を積極的に尚且つ余裕を持って行えるようになるには、辛いとき、寂しいとき、その他様々な困難に打ち負かされたときに、傍で支えてくれる友人がいることによる心の安定・安心、つまり **Emotional Loneliness** (感情的孤独) の解消があればこそであろう。本学では、学内の留学生と日本人学生が互いの国籍や文化の壁を超えた友情の輪を作り、特に留学生が抱える **Emotional Loneliness** の解消を主な目的とした「国際交流クラブ」がある。1996年に創部されて以来、現在約25名、約15カ国の日本人学生と留学生が所属し、顧問の教員と指導員の職員(筆者)2名によって指導を行なっている。

近年の主な活動としては、民族衣装の試着体験や留学生の母国のお茶やお菓子を囲んでの座談会(International Café)、ユニセフカードを利用した近隣小学校児童との文通、古切手収集運動、学生が講師となって母国の料理を教える国際料理教室、近隣小学校児童との交流会、留学生による歌や踊りの披露を行うコンサート、留学生の国のスポーツを楽しむ国際スポーツ交流会などを多数行っている。また2008年から環境問題について議題にあげ、部員一人ひとりが身の回りでできることについて考え、意見を交わし実践してきた。そして学内でエコキャップ回収運動を推進、さらに2010年には環境問題をテーマとした討論会を三重県の後援を受けて、行政・企業・地域・環境団体・高校生等の多くの参加者とともに実施し、大変良い評価を頂くことができた。なお、このような活動を企画する際には、市報や新聞等の協力を得て地域から参加者を募りより多くの人の参加を促している。また逆に地域のイベントなどに参加・協力するなど地域との交流を積極的に試みている。(表11)

#### (2) 留学生を対象としたアンケート調査の集計

国際交流クラブでの活動の参考とするために、学部留学生を対象にアンケート調査を実施し、結果77名から回答を得た。まず「大学内で日本人の友人はいますか?」(表12-1)では、全体の半数以上が「YES」と回答した。しかしその親密度として「親友と言える」「仲が良いほうだ」については、全ての学年で半数以下となった(表12-2)。また仲良くなった場所は「大学の授業やゼミ」が最も多い(表12-3)。これは本学の日本人と留学生と一緒に授業を受講できる環境が影響していると思われる。一方、「No」と回答した学生は、各学年で約20%~40%の割合で存在し、そのうちすべてが日本人の友人を望み、とくに「とても欲しい」が約60%~75%を占めた(表12-4)。続いて「大学内で他の国の留学生の友人はいますか?」(表12-6)では、全体の約60%~70%以上の割合で「YES」と回答した。そのうち「親友と言える」「仲が良いほうだ」については、日本人(表12-1)と比べて高い割合となり、3~4年生では比較的に仲の良い友人がいることが分かる(表12-7)。これは国籍は違えども同じ留学生としての仲間意識・帰属意識が働いていることが推測できる。また日本語の授業など留学生のみを対象とした講義やイベントがきっかけに仲良くなるケースも多いためであろう。さらに仲良くなった場所としては、同様に「大学の授業やゼミ」が多かった(表12-8)。一方で「No」

と回答した学生の全てが、他の国の留学生の友人を望んでおり（表 12-9）、その理由として「外国の文化や習慣を学びたい」が比較的に多い（表 12-10）。特に気になる点は、日本人の友人がいない学生が、各学年で約 20%～40%の割合で存在しており、そのうちほぼ全員が、大学生活をおくるにあたり困っていることとして「友達ができない」を選択していたことである（表 12-11）。このことから友達がいらないという孤独が、留学生活に支障をきたしていることが認識できる。また「アルバイトが見つからない」は比較的 1～2 年生が 3～4 年生に比べて多少高い割合となっており、日本の生活や文化に馴染めない 1～2 年生時のアルバイト探しは簡単ではないことが分かる。「日本語が上手にならない」は、どの学年も変わらず約 20%前後となっているが、筆者の経験から、他人が見ると日本語が上手だと思える留学生も、留学生本人は自分の日本語能力に自信が持てずに過小評価している点もあると思われる。「入管や役所での手続きが難しい」は、3 年生で 23%と高くなっているが、これは 3 年次の在留資格更新の影響が考えられよう。「学内での必要な事務手続きが難しい」は、1～3 年生まで 10%以上となっており、留学生にとって、一般学生向けに作成された事務連絡など、比較的日本語の難解度が高い文章等を理解することと、母国との学校制度の違い等を理解することはなかなか困難のようだ。「生活費が足りない」では、どの学年も 11%～17%の割合となっており、アルバイトで生計を立てながら生活をしている私費留学生が多く在籍する本学の現状が理解できる。続いて「国際交流クラブの学内での知名度」（表 12-12）については、1 年生は、55%であるのに対して、学年が上がるごとにその割合は上昇し、4 年生では 91%となっている。さらに国際交流クラブの必要性について聞いたところ「とても必要」「必要」と答えた学生が半数以上となり、これに「まあまあ必要」を入れると、ほぼ全員が国際交流クラブの必要性を感じていることが分かる（表 12-13）。また回答者の約 80%が国際交流クラブに期待することがあると答え（表 12-14）、「日本人と友人になれるような交流会などの企画」「他の国の留学生と友人になれるような交流会などの企画」が多かった（表 12-15）。最後に、国際交流クラブに入部したいか聞いてみたところ、約 60%～70%が「YES」と答えた（表 12-16）。また具体的に入部後に何がしたいのかを聞いてみたところ「日本人と友達になりたい」「他の国の留学生と友達になりたい」が多かった。また 4 年生では「困っている留学生のお手伝いをしたい」が多く、先輩としての経験から後輩を思いやる気持ちが伺える（表 12-17）。また希望しない学生にその理由を尋ねたところ「他のクラブに入部している」を除くと「アルバイトで忙しい」が比較的多い（表 12-18）。

### (3) 国際交流クラブ部員へのアンケート調査

国際交流クラブの卒業生（10 名）を対象にアンケート調査を実施し、まず「国際交流クラブに入部する前に期待したこと」と「卒業後実際に入部して得たこと」について質問した（表 13-1）。そのうち「他の国の友人を作りたい」「様々な国の文化や習慣を知りたい」「国際交流・国際協力に取り組みたい」「海外の文化や習慣に適応できる人間になりたい」に関しては、国際交流クラブに入部する大きな動機として想像し易く、卒業後もその期待を十分に迎えることができたようだ。ここで注目したいことは、「地域の人と交流をしたい」「責任感を身につけたい」「企画力を身につけたい」「人を思いやる心を学びたい」「人前での発言力を身につけたい」「プレゼンテーション能力を身につけたい」が、入部する前に期待したこととして選択した学生は比較的少なかったが、卒業後には、「地域の人との国際交流ができた」「責任感が身についた」「企画力が身に

ついた」「人を思いやる心を学んだ」「人前での発言力がついた」「プレゼンテーションの能力があがった」を選択した学生が多くなった(表13-2)。また「国際交流クラブの活動で特に興味・印象のあったこと」については、「日本人とお友達になれるような交流会」が全体の15%、「地域の行事への積極的な参加」が20%、「他の国の学生(日本人を除く)と友人になれるような交流会」が30%を占めている(表13-3)。質問4「国際交流クラブの行事に参加するために障害となったこと」については、アルバイトが46%、その他のクラブが27%となった(表13-4)。

#### (4) 今後の発展と課題

在学生を対象とした国際交流クラブについてのアンケートを見ると、相手が日本人、留学生に関わらず、友人を作りたいと望み、また友達がいないうという精神的な寂しさが、留学生活に支障をきたしていることが分かる(表12)。さらに国際交流クラブに入部したいと思う理由として、友人を作りたいからと答えた学生が比較的に多かった。また実際の国際交流クラブの卒業生へのアンケートでは、国際交流クラブの活動で特に興味・印象のあったこととして「日本人と、他の国の学生(日本人を除く)と友人になれるような交流会」が約半数の割合で選ばれている(表13)。つまり精神的な支えとなる友人を作りたいという Emotional Loneliness の克服のための一つの戦略として、国際交流クラブの入部が選択されその期待に十分応えることができていることが示された。しかし、国際交流クラブの活動は、学内での留学生が抱える Emotional Loneliness の解消のための取り組みの他に、学内や地域での多文化共生事業に係る取り組みとしての国際理解・国際交流活動を積極的に行なっており、これは「学生地域派遣事業」と同様に Social Loneliness (社会的孤独)の解消をも目指している(表14)。また前述したように、国際交流クラブ部員へのアンケート調査にて、卒業後にクラブに入部して良かったこととして「地域のひとと交流ができた」「責任感が身についた」「企画力が身についた」「人を思いやる心を学んだ」「人前での発言力がついた」「プレゼンテーションの能力があがった」を選択した学生が多くなったことから、国際交流クラブでの地域や学内での様々な活動が、学生達の社会人基礎力を身につける教育の場となっていることが示された。つまり地域や学内における活動を企画し、実践し、失敗を反省する、そして再度挑戦するなかで、企画力、責任感、自立心、愛国心、多文化尊敬の念、想像力、人への思いやりなどを学ぶ。またイベント等では、司会や挨拶など常に人前に立ち発言することで、スピーチ能力や、プレゼン能力を向上させていくことができるのである。

さて、今後の国際交流クラブでの活動の可能性として、アンケートからの要望にあるように、日本語サポート、新入生への相談や生活アドバイス、入管手続きのサポートなども是非検討していきたいところではあるが「国際交流クラブの行事に参加するために障害となったこと」としてアルバイトが約半数を占めているように、特に多くの留学生がアルバイトをして生活費を補っている苦学生であるというなかで、学業、クラブ活動、アルバイトとの両立は現実的になかなか難しい。この点を考慮するとこれ以上の活動の幅を広げることには、留学生の負担を増加させ持続的な活動を育むことができなくなる恐れから、指導員として現在のところ考えていない。しかし、近年の学生の就職難に対応できる学生を育成できるよう、企業との活動展開をひとつの目標として現在検討している。前述してきたように「学生地域派遣事業」において、地域国際交流団体、自治体、教育機関、行政から依頼を受け、毎年多くの学生が派遣され、交流が促進されてきた。また同様に「国際



交流クラブ」においても、その中心的な活動は、大学内における日本人学生と留学生との交流促進でありながら、地域国際交流団体、自治体、教育機関、行政が主催するイベントに参加するなどの地域貢献の側面でも活動を促進してきた。しかしこれまで企業との交流に関してはあまり行われていなかったことが一つの課題であった。具体的には、地域の優良な中小企業との交流と、相互の学びの機会を作り、中小企業社員は、留学生から国際理解の推進と海外や国内での外国人との企業活動へのヒントなどを学び、留学生は、日本企業風土の理解、日本企業への就職に必要なスキルと知識、そして日本企業での就業体験等を得る。これらは一過性のイベント的な交流にならないよう、継続的な交流と連携を生み出すシステム作りをまず行う必要があるため、現在は協力を頂ける企業との交渉を進めており今後の展開に大いに期待している（表 14）。

#### 4. おわりに

今年、日本語学校を数十件訪問し、担当教員と話をしたが、どの学校も 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による風評の影響を受け、日本への留学を希望する留学生が減少傾向にあると言われていた。またこれまで留学生への受け入れに積極的であった大学も、災害や政治・経済等に大きく影響を受け易く、安定した受け入れ数の確保と予測が難しいことに今後は受け入れに消極的にならざるを得ない大学も出てくることが予想できる。このようなことから、世界の留学生の潮流もますます日本から遠ざかり、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、そして留学生送り出し国から受入れ国へ転換を図ろうとするシンガポールや韓国、中国などのアジアの新興留学生受入れ国へと流れるだろう。その結果、2020 年を目途に 30 万人の留学生受入れを目指すとした「留学生 30 万人計画」の達成にも影響してくることが予想できる。このような現況に FSA は、これまで以上に世界の潮流に沿った広い視野を持ち、留学生獲得戦略の設定に努めなければならない。そして日本留学の魅力について客観的に問い、留学生がどの国よりも日本を選び、安心して実りある留学生活を送ることができるように、受入れる大学のサポート体制の強化に尽力するべきであろう。

留学生は、母国の両親や友人から離れ、慣れない外国で留学生活を送るなか、常に心のなかに「孤独」を感じている。そしてその度合いが強くなるような時は、学業やその他の活動にも支障をきたす。そしてさらにひどい場合には、鬱病などの精神疾患を引き起こし命を脅かす事態に陥る学生も現実にいる。留学生を受け入れるにあたり準備されるべき大学のサポート体制を様々な方面から考え、見直す必要があろうが、留学生が心に抱える孤独の解消に向けたサポートこそ、留学生が実りある留学生活を送るためのすべての基礎である。またその認識を誤れば、大きな事故に発展する危険性を大学は意識していなければならない。本稿ではこれらの実践例として「学生地域派遣事業」と「国際交流クラブ」による国際理解・国際交流活動の取り組みの一部を報告した。そのなかでこのような留学生と地域との係り合いが、単なる国際交流ではなく、多文化共生の視点に立った、より双方向的で互恵的なものでなければならないことを述べた。そして FSA は、これらの活動から地域、大学、そして留学生自身に価値ある効果（メリット）を生み出せるよう（表 15）企画、調整し、またそれを地域に情報発信することで、さらなる地域と留学生との交流が促進されるようコーディネーター・ファシリテーターとしての重要な役割を持つことを確認した。

最後に学生地域派遣事業をコーディネートするにあたり、また国際交流クラブによる地域での活動のなか

で、筆者自身も地域の様々な分野に関わる人と出会うことができ、人的ネットワークを深めることができた。それは、単なる事務手続きのみの対応からは決して生まれるものではなく、学生と一緒に地域に出向き、地域の人々と直接対話し、共に考え、共に汗を流し、共に活動の場に立って同じ雰囲気を感じ合う生きた交流の中から得た信頼関係である。当然、国際交流には必ず誤解やコミュニケーションの摩擦や衝突が起こるが、決してそれが面倒と思わず、相手の主張と立場をできるだけ理解するように努め、その上で FSA 個人としての考えや大学としての立場をはっきりと伝えることも必要であった。最も残念なことは、コミュニケーションの摩擦や誤解を恐れて、交流自体を閉ざしてしまうことに違いなく、このことは活動を行う留学生にもしっかりと伝えてきたつもりである。留学生たちは地域との交流を通して経験する様々な摩擦や違いに戸惑いながらも、活動先でもらったお礼のお手紙やプレゼントを見せながら、また行きたいとうれしそうに報告してくれる。そして気が付けば、地域での知人・友人が増え、どこに行っても堂々と自信を持って話し、大学の顔となるくらい立派に成長し、無事に卒業していく学生たちを見ることは大きな喜びでありやりがいい繋がった。またこれらの事業を通して普段のやりとりではなかなか分からない学生達の素顔や特技などを知ることができ、お互いに深い信頼を得ることができた気がする。筆者は 2008 年を最後にこの学生地域派遣事業の担当を外れたが、大学がこの事業の意義と価値、そして地域からの期待を深く理解し教育的な見地を持ってさらに進化させていくことを強く願う。

(表1) 派遣内容・テーマ

<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国の異なる文化に触れ、興味・関心を持つ</li> <li>・韓国の子供たちと鈴鹿の子供たちとの交流</li> <li>・世界の料理教室（スリランカ・インドネシアなど）</li> <li>・思いっきり楽しもう！世界のダンス</li> <li>・園児・老人会の方との七夕祭りの行事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国のお話と遊び</li> <li>・中国・韓国と日本の若者文化の比較</li> <li>・外国籍児童への日本語指導と国際交流</li> <li>・中国からの専攻生を迎えての交流会</li> <li>・インドネシアの災害についての報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境問題について留学生と討論会</li> <li>・馬頭琴の演奏とモンゴルの紹介</li> <li>・ウクライナの伝統と文化を学ぶ</li> <li>・イングリッシュサマーキャンプ</li> <li>・日本人学生による海外留学体験談 その他多数</li> </ul>
--	--	---

(表2) 派遣者数・派遣実績集計（2004年度～2005年度）

2004年度 4月～3月まで

	件数	派遣学生出身国										派遣人数
		中国	韓国	ウクライナ	インドネシア	フランス	スリランカ	イギリス	ブラジル	マレーシア	アメリカ	
小学校	37	44	29	3	2	2	0	1	1	1	0	83
中学校	12	13	9	0	1	3	0	1	1	0	0	28
高等学校	15	13	5	1	4	0	0	1	0	1	0	25
幼稚園	2		2									2
地域	18	12	12	6	0	0	4	0	1	1	1	37
合計	84	82	57	10	7	5	4	3	3	3	1	175

2005年度 4月～3月まで

	件数	派遣学生出身国															派遣人数
		中国	韓国	日本	アメリカ	ウクライナ	カナダ	イギリス	マレーシア	スリランカ	インドネシア	ミャンマー	ベトナム	ブラジル	フランス	ルーマニア	合計
小学校	28	33	17	1	4	4	4	1	3		2						69
中学校	3	1	1														2
高等学校	12	12	7	6	2		1	1						1			30
幼稚園	16	16	7			4	1										28
地域	31	28	27	18	8	3	2	2	1	2		1	1			1	95
合計	90	90	59	25	14	11	8	4	4	2	2	1	1	1	1	1	224

2006年度 4月～3月まで

	件数	派遣学生出身国												派遣人数
		中国	韓国	ウクライナ	日本	インドネシア	アメリカ	マレーシア	カナダ	ラオス	ベトナム	ミャンマー	オーストラリア	
小学校	11	17	2			1						1		21
中学校	3	1		6										7
高等学校	12	12	3		6	1	2	2					1	27
幼稚園	8	11							1					12
地域	20	18	23	6	3	1	1			1	1			54
合計	54	59	28	12	9	3	3	2	1	1	1	1	1	121

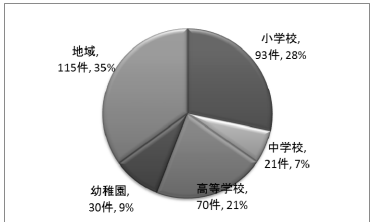
2007年度 4月～3月

	件数	派遣学生出身国										派遣人数
		中国	韓国	インドネシア	アメリカ	ウクライナ	日本	カナダ	ニュージーランド	ベトナム	イギリス	
小学校	7	12	1	3	5	1	3			1	1	27
中学校	2	3		1								4
高等学校	14	16	13	3	2	2		2				38
幼稚園	4	3		2					1			6
地域	21	24		4	1	2						31
合計	48	58	14	13	8	5	3	2	1	1	1	106

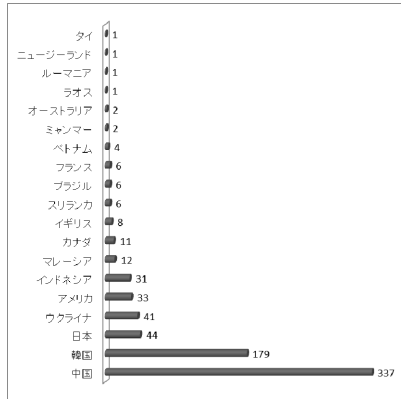
2008 年度 4 月～3 月

	件数	派遣学生出身国											派遣人数
		中国	韓国	日本	アメリカ	インドネシア	ウクライナ	マレーシア	ブラジル	タイ	ベトナム	オーストラリア	
小学校	10	16	6	5	2	3							32
中学校	1	1	1										2
高等学校	17	18	9	2	2	3	3	2	1				40
幼稚園	0												0
地域	25	13	5		3			1	1	1	1	1	26
合計	53	48	21	7	7	6	3	3	2	1	1	1	100

(表 3) 5 年間の派遣依頼件数

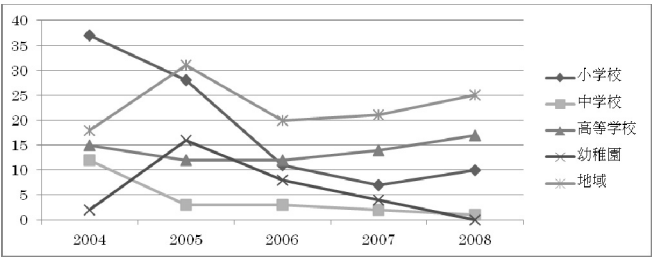


(表 4) 5 年間の派遣学生数と出身国



(単位 : 人)

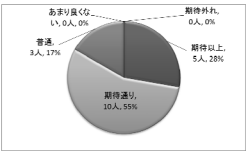
(表 5) 5 年間の派遣依頼件数 推移



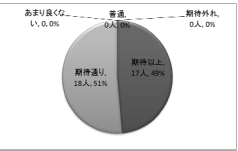
(単位 : 人)

(表 6) 満足度

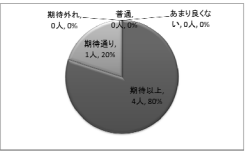
[幼稚園]



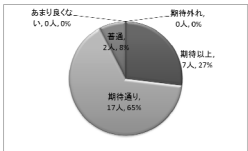
[小学校・中学校]



[高校]



[地域]



(表7) 良かった点

## [高校]

- ・生徒をうまく巻き込んでいただい、積極的に参加することができました。準備していただいたパワーポイントも興味深く、自然に引き込まれて行きました。ディジュリドゥの生演奏もしていただき盛り沢山で充実した授業となりました。
- ・日本語も大変上手で、生徒側からあるいは教員側からの質問に丁寧にお答えいいただきました。また逆に質問を受けとても充実できた授業となりました。
- ・少し年上の優しいお兄さんと気軽に話すことができたという感じで生徒達は喜んでいました。
- ・学生たちに誠実に臨んでいただき、大変充実した交流となりました。
- ・質問の時間が多くとれ、中国の若者の正直な気持ちを聞けました。
- ・教科書では分からない中国の様子を分かりやすく話していただき非常に有意義でした。
- ・生徒の様々な質問に対し、丁寧に分かりやすく答えていただきとてもありがたかったです。
- ・中国・韓国の文化と日本の文化の違い等に詳しく説明をしてもらいました。

## [小学校・中学校]

- ・写真やクイズ形式で説明を加え、児童の興味関心を引き出しながら文化や習慣を教えて頂きました。
- ・流暢な日本語で聞く人を引き付ける話し方で素晴らしいかったです。2時間があっという間でした。
- ・外国の遊びを直接その国の人々に教えていただくことで、興味関心をより高めることができた。
- ・明るく楽しい雰囲気や有意義な時間を過ごすことができました。またとても慣れていた子どもの心をしっかりとつかんで進めて頂き、子どもたちも親しみを感じていました。
- ・民族衣装を着て踊ってくださり、より深くそのお国に伝わる文化に出会い、知ることができました。
- ・中国からの専攻生の通訳をしていただき、中国での生活や小学校の様子をよく知ることができました。
- ・生徒からの素朴な疑問に丁寧に答えていただき、さらに英語以外の外国語に触れることができました。
- ・フレンドリーに積極的に子どもと関わる姿勢と人柄が大変すばらしいと思いました。
- ・きらきら星を韓国語で歌いました。児童がよく知っている曲なので親しみを感じながら歌っていました。
- ・子供たちの身近な学校をテーマとして、中国と日本を比較できたことが良かったです。
- ・外国の遊びと日本の遊びの共通点を感じました。児童はレールの違いに感心しながら喜んでいました。
- ・たくさん違いと似たことを知り、出会いを通して中国や、中国人に対する興味と親しみを持ちました。
- ・簡単な言葉を教えてもらい、自国の小学校の様子から文化の違いなどを興味深く話してもらえました。

## [幼稚園]

- ・民族衣装を着て踊ってくださり、より深くそのお国に伝わる文化に出会い、知ることができました。
- ・おもちゃや絵本を持ってきてくれたので、子どもたちはとても喜んでいました。
- ・中国茶を実際にご作って飲み、一緒に踊りを踊ったことを終わった後も思い出して喜んでいました。
- ・ウクライナのクリスマスの様子がよく分かり、子ども達も興味深く話が聞けてよかったです。
- ・モンゴルの言葉や文字に触れ、英語以外の外国語があることに園児たちは気がついたようです。
- ・韓国の遊びを一生懸命に教えていただき、子どもたちも親しみを持ちながら楽しいひとときを過ごせた。
- ・地域の老人会の人にも参加してもらい、お年寄り、園児、留学生との交流がとても暖かい雰囲気になりました。
- ・「あー楽しかった」と両親に留学生のことを話す園児がたくさん見られました。
- ・なごやかに明るく、傍に積極的に寄り添い、園児と親しみを持って交流していただきました。
- ・七夕だったので短冊に願いをみんなで書き日本の文化にも触れてもらいました。
- ・サンタさんとして園児一人ひとりにプレゼントを渡していただきました。
- ・インタビューにも分かりやすく答えていただき子ども達も大変喜んでいました。
- ・優しく話していただいたので、子どもたちも安心してゆったりとした気持ちで話を聞くことができた。

## [地域]

- ・世界にはいろいろな国があり、文化・言語の違いを実際の体験にして学ぶことができました。
- ・日ごろ見ることのできないモンゴル舞踊を見させていただき感動しました。
- ・韓国の軍服や資料を通して、軍隊制度について教えてくれました。テコンドーがすごかったです。
- ・留学生が日本語で一生懸命説明しようとすることは、留学生にとってもよい勉強になると思います。
- ・韓国の子どもと日本の子どもの交流会で、リーダーとして両国の子供を結び役割を果たしてくれました。

- ・韓料理を教えてもらいました。食をとおしてその国の文化や生活を知る良い機会となりました。
- ・多くの市民の方で外国の文化について紹介でき、モンゴルについて新しい認識を持ちました。
- ・言葉が通じなくても一緒にダンスをして汗を流し、自然と交流が行われた。留学生ものびのびとダンスをし、喜んで踊ってくれました。会場の一体感が生まれ雰囲気が非常に良かったです。
- ・生徒への積極に話しかけていただき、国際理解、特に英語の大切さに気がつかせていただきました。
- ・民族衣装を着ての楽器の演奏に感動しました。留学生の母国の写真を見せてくれるなどの工夫もよかったです。また準備の段階から積極的に手伝っていただけたことに感謝です。
- ・快く引き受けていただき、集合時間をきちんと守ってくれたことと、突然の要望に柔軟に対応していただいたこと。事前の打ち合わせから留学生の誠実な人柄が伺えてよかったです。

(表8) 悪かった点

**[高校]**

- ・外国の人と接するのが初めての学生が多く、なかなか積極的に話しかけていくことができず、留学生に気をつかっていただくことになり申し訳なかったです。

**[小学校・中学校]**

- ・リマインダーを送るのを忘れ、留学生の一人が来ていただけなかったため、クラス単位でできなく学年全体の活動になってしまいました。
- ・コンノリはグループで作戦をねりあげて勝負するので、小学生6年生には少し難しいとことがあった気がします。
- ・年に派遣回数の制限があること。回を重ねることで発展性が生まれてくると思います。
- ・いろいろな国の人と交流したいので、いつ頃、どの国の人が来てくれるのか早く分かってと計画が立てやすいです。
- ・欲張りすぎて一つ一つの時間が少なかったのは申し分けなかったです。
- ・時間に余裕がなくてきちんと打ち合わせができなかったため、うまく内容が伝わっていませんでした。
- ・子ども達と触れ合う時間をとっていましたが授業で早く帰っていただくことになり残念でした。
- ・3年生には難しい言葉やわかりにくい内容説明があったので、発達段階に応じた説明の仕方や言葉で伝えていただけると良かったです。
- ・ゲームを紹介してもらったのですが準備不足と人数の関係でできなかったのがこちらの反省点です。
- ・活動当日までしっかりと時間をとって打ち合わせを行えばよかったと思います。

**[幼稚園]**

- ・もうすこしゆとりのある時間配分ができればよかったです。
- ・当初予定していた人が急病になり戸惑いましたが、きちんと次の方を紹介していただいたのは良かったです。
- ・時間が延長してしまい、留学生が授業に遅れそうになったので申し訳なかったです。
- ・反省会を持つ時間が持てませんでした。

**[地域]**

- ・打ち合わせ時間が短くて、話を詰めることができませんでした。
- ・日本語能力試験と重なり、留学生の参加者が少なかったです。
- ・拘束時間が長く留学生の方には、ストレスが溜まったと思います。
- ・こちらの準備不足で時間設定が不十分でした。
- ・留学生との付き合いが初めてでしたので、日本語が上手に話せていたから安心していただけるところ、上手に伝わっていないこともありましたが、本当に理解してもらえたかを確認しないとけないと勉強になりました。
- ・事前連絡を怠り、内容を留学生にすべてまかせたためスムーズな進行ができませんでした。
- ・参加者が少なくもっと早くから準備をしておけばよかったと思います。

(表9) 学生の感想

**◆大学院2年 Sさん(国籍:インドネシア)**

大学生生活は勉強だけでなく、ボランティア活動に参加してとても充実した時間を過ごすことができました。ここで自分の文化・歴史・習慣などを紹介し、母国の教育事情と日本の教育事情も比較しました。そして子どもたちと遊んだり、ゲームをしたり、ときには真面目に聞いてくれる学生のために母国のものをプレゼントしました。他には地域の方々や母国の事情や多文化体験などを話し合ったり、母国の料理や言語などを教えることもできました。また母国の文化だけでなくイスラム文化なども紹介し、理解してもらえるまで議論しました。もちろん交流する間にトラブルや大変だったこともありましたが、小・中の学生たちはきちんと聞いてくれるし、また積極的に質問をしたりしてくれました。しかし高校では真面目に聞いてくれる学生が少なくなり、寝ている学生やお喋りしている学生もいました。せっかく資料を準備し、日本

語や漢字なども一生懸命覚えながら説明したのに、彼達が聞いてくれなかったことに大変がっかりしました。しかし、これも一つの経験だと思って、もっと聞いてくれるように様々な工夫をするようになりました。もちろんたくさんの得たものや良かったこともありました。国際交流によって日本の文化や教育などを肌で感じ、お互いに話し合うことができました。また幅広い年代、職業などの人と知り合え、仲間も増えました。そして何も知らないイスラム教に関しても、たくさんの日本人が理解してくれるようになったことが大変印象的でした。それだけでなく自国を紹介する間に色々なことを考えさせられ、もっと自国のことを勉強する必要があると思うようになりました。このような様々な国際交流からの体験があって、学問的な勉強だけではなく、学校が教えてくれないものも習うことができました。色々なことを挑戦した上で、新しい自分が見つかり、広い視野で物事が見られるようになってきました。もちろん習慣や感覚のギャップには戸惑うこともたくさんありましたが「もっと日本人の文化や普段の生活を知りたい」という情熱で、自ら積極的に異文化を受け入れました。将来私も違う環境で知識を広め、社会人として新しい分野を勉強していきたいと思います。最後に大学が私に与えてくれた出会い、チャンス、チャレンジ、経験などに感謝する気持ちが一杯です。

◆学部4年生 Pさん（国籍：韓国）

私は日本にきてはじめてボランティアという活動をしました。学校に行って韓国の歴史・文化・習慣や、現在の韓国の学生たちはどんな生活をしているのかを説明したり、韓国の遊びと一緒にしたりしながら小さな国際交流ができたと思います。このような活動を通じて、逆に私が知らなかった日本の生活、文化、学生生活などを習いました。私が今まで参加したボランティア活動の中でも一番記憶に残っていることがあります。私には最初の小学校でのボランティア活動の話です。緊張してどきどきしていたのですが、先生と子ども達が喜んでくれて、ここで子どもといういろんなことを話したり遊んだりしましたが、お別れのとき子どもが泣き出しました。私は日本ではじめて情を感じました。これからはいろいろなボランティアに参加していいたい。思い出を作りたいです。そして韓国を日本だけではなく、全世界に紹介したいと思います。

◆学部2年生 Fさん（国籍：日本）

県内の高校で留学生は韓国についての話を、私たち日本人は海外体験談を話させてもらいました。留学生の友達はどうすれば高校生に上手く伝わるのかを考え、ゲームを取り入れたり歌を歌ったりして工夫を凝らしていました。そのなかで留学生が母国の事をよく知っていることに感心すると同時に、私が日本を伝えるときここまできちんと伝えられるのだろうかと思いました。私は現地で撮った写真を使い、ソーシャルでの体験を話しました。特に印象に残ったことは高校生の皆さんが熱心に聞いてくれたことです。私達のクラスでは積極的に質問してくれた学生もいました。今回の体験から海外に行くだけでなくその経験の良さを伝えて、一人でも多くの人に興味を持ってもらうことが大切だと改めて気付かされました。そして海外に目を向ける以上に、母国についても目を向けなければいけないと思いました。

◆短期留学生 Nさん（国籍：ウクライナ）

私は留学している間よくボランティアをしました。これは忘れられない思い出です。たくさんの学校で子どもにウクライナの文化・音楽・伝統的な料理の作り方を教えました。日本の大人の性格は、振る舞いもいいし、優しいし、ルールもきちんと守る人がほとんどです。でも私はみんな自分の感情を素直に表せないように見えました。しかし子どもは違います。ボランティアで子ども達と会ってよかったなとほっとしました。子ども達はどこでも自分の感情を表しますね。それは自然なことです。日本の子ども達と会ったとき本当に幸せでした。子ども達は私にキスをくれました。いろいろなゲームと一緒に遊びました。みんなとても元気で、とてもきれいな心を持っています。そして私の話を真剣に聞いてくれました。みんな世界の文化に大変興味があるようです。本当に楽しかった！このボランティアを通して日本人がもっと好きになりました。この経験のおかげで一つの夢ができました。幼稚園の先生になりたいです。ウクライナの子どもに日本の子どもの心を伝えたいです。このような経験をさせてくれた人たちに感謝しています。どうもありがとうございました。日本社会に興味がある人にはこのボランティア活動をおすすめです。

（表10）その他の意見・感想等

【高校】

- ・このような企画は初めてで、国際交流？一体何をするのだろう。一時間足らずで何ができるのだろう。生徒はのってくるのだろうかと不安で、直前の打ち合わせが終わった後も、拭拭し切れてはなかったのですが、ワークショップが始まるとともに杞憂であった事が分かりました。
- ・留学生の話だけでなく、生徒との架け橋として、更に身近な海外経験者としての日本人学生の存在、クイズ形式での交流、それらがうまく融合し、生徒達は自然に引き込まれていきました。有意義な経験を生徒と共にさせていただき感謝申します。
- ・留学生はもちろんのこと、日本人の学生も時間をかけて用意周到に準備して来た様子で頭が下がりました。海外での経験の話は私自身も聞いていて興味深かったです。時間の制限があり、もっと話を聞きたかったと非常に残念に思います。生徒たちもいつもの私の授業の姿からは想像できない盛り上がり様で、ほとんどの生徒にとって思い出に残る楽しい1時間となったと思います。
- ・留学生とお話をしたりすることが初めてだったので、ドキドキしていました。いろんなことを教えてもらい、生徒も私もいい経験になりました。聞くマナーのまったくていけない生徒も多数いる中で、絶えず笑顔で進めていっていただけたことにとても感謝しています。
- ・打ち合わせの時間を充分取ることができなかったにもかかわらず、多くの講堂で生徒は充実した時間を過ごせたのでないかと思います。

短い時間でしたが、音楽をかけるなどの工夫や、熱い思いを語っている姿まきと生徒たちに響くものがあったのではないのでしょうか。反面に来ていただいたみなさんには生徒が積極的に話を聞かないなど、ご迷惑をおかけした面もあったかと思いますが、是非これに懲りずにまたすばらしいワークショップを展開していただきたいと思います。

- ・思いつきでいろいろ話す生徒がたくさんいてご迷惑をおかけしました。クイズ、早口言葉などいくつもプログラムを考えていただき、生徒たちは楽しそうでした。普段あまり積極的な活動に参加しない生徒が自ら前に出てチャレンジしていた姿に驚きました。また今回をきっかけに地元の文化である連綿と挑戦している生徒が何人かおり、身近にありながらも日常では触れることのない地元の文化に生徒自身が接することができこれもよい機会になったと感じています。

#### [中学校・小学校]

- ・子供たちにとって貴重な体験ができました。本当にありがとうございました。
- ・今後も多くの国の方と交流し多文化共生の意識を高めていきたいと思います。よろしくをお願いします。

#### [幼稚園]

- ・報告書や申し込みの方法が分かりやすくて助かります。
- ・大学の担当者の方からいろいろご相談をさせていただきました。いろいろとご迷惑をおかけしました。感謝しています。
- ・とても素晴らしい制度なのでもっと早く知ることができたなら良かったなと思いました。本校の職員も是非授業に取り入れたいと好評でした。お知らせを年ご程度か出していただければうれしいです。
- ・小学生は具体的な物を使ってお話しできると大変理解しやすく、また興味をもって聞こうとします。今回の学生さんのように工夫した交流の形をとってくださると有意義ななと思いました。
- ・急なお願いに快くご対応ご支援いただき本当にありがとうございました。素晴らしい授業で感激しました。
- ・多文化理解の上から今後もこの事業を活用させていただきたいと思っています。言葉や文化・生活の様子を”本人”から話を聞かせていただくことは貴重です。その中に民族衣装や楽器など目で見たり、触ったりできる物もあればより深められるのではないかと思います。
- ・新聞でこのような素晴らしいプログラムがあることを知りました。子供たちも大喜びで、心に残る触れ合いが持てました。ありがとうございました。外国人とのかわわりを積極的に持てる子供の育成を目指しているので良い雰囲気でした。
- ・1年を通して定期的にできるようなプログラムを希望します。
- ・留学生の授業の関係上難しいのですが、平日の交流をもう少し可能にしていただければと思います。

#### [地域]

- ・今後もこれまでと同様に地域の国際化推進事業に協力をお願いしたい。また協力可能な人材のリストや内容などがあると役立ちます。
- ・国際交流を目的に様々な事業を行うには留学生の層の協力が必要だと感じています。よって年2回の派遣を少なくないように思います。
- ・こちらの要望に柔軟に対応していただけるのはうれしいけど、反対に「こういうケースがあります」とパターンがいくつかありチョイスできるのもいいかなと思います。
- ・お国事情・お国自慢などの留学生の気持ちは話会でもいいと思います。
- ・今回の出会いも、新聞での記事を見たもので急なお願いになりましたが、親切に直ぐ対応していただき大変感謝しています。今回の縁を大切にまた他の国の留学生紹介してください。
- ・可能ならば、民族衣装の貸し出しや楽器の貸し出しをしてもらえるシステムがあれば良いと思う。
- ・県内で活動しているNGO団体との協力と積極的なPRをお願いします。
- ・いろいろな国の人と触れ合うことはこれからの子ども達にとっても必要だと思います。これからもこのような事業を是非継続してください。
- ・若者との交流によって若者が育つてくださる。お手伝いをしたいと思って来てくださる方々の動きは全然違います。要請した私達が彼らにうまく期待通りのことをお伝えできたものかどうか少し不安でした。でも皆様和気あいあい仲間に入ってくださいました。
- ・小学校の授業時間と大学の授業時間との調整がうまくできず、夕方まで留学生のアルバイト等で、直接お会いできず、電話による打ち合わせしかできませんでした。事前打ち合わせが十分できるよう、大学側に配慮をお願いします。

(表 11) 年間スケジュールの一例

#### ◆通常の活動

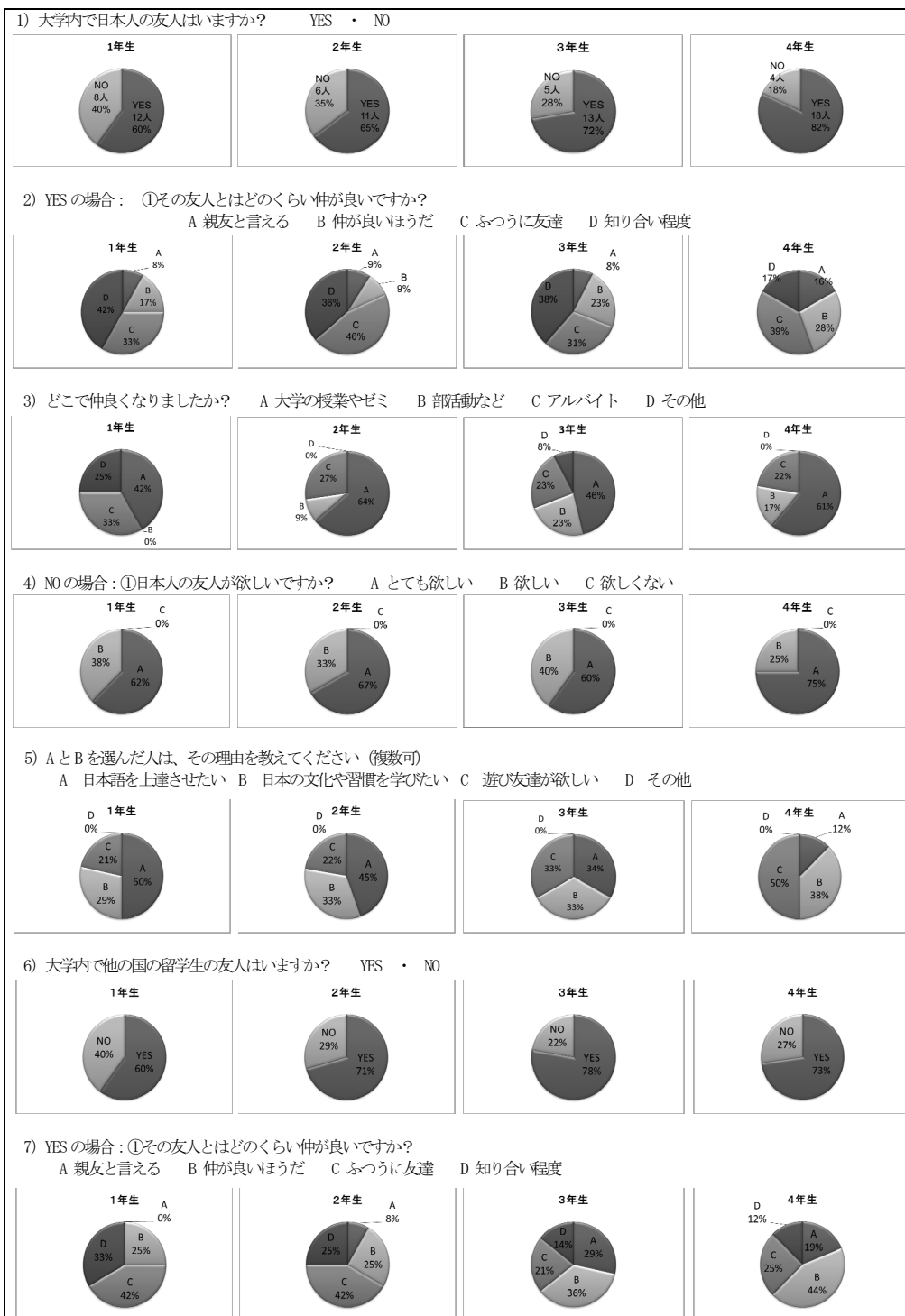
- ・隔週1回のミーティング・エコキャップ推進運動・古切手収集運動・募金活動・ユニセフカードを使った近隣小学校児童との文通

#### ◆毎月1回の国際交流イベントの企画

4月 新入生歓迎会	5月 国際交流パーティー	6月 BBQ 交流会	7月 スポーツ大会	8月 地域夏祭り
9月 討論会(国際環境など)	10月 大学祭参加	11月 秋の国際交流旅行	12月 国際交流の集い	1月 国際料理教室
2月 民族コンサート・近隣小学校との交流会	3月 反省会			

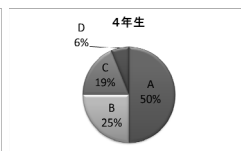
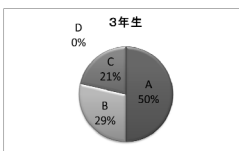
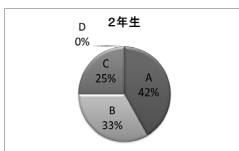
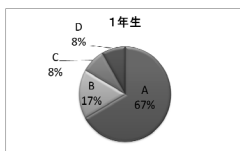


(表12)



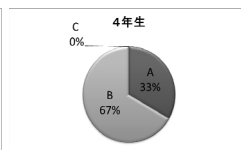
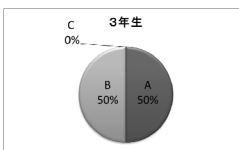
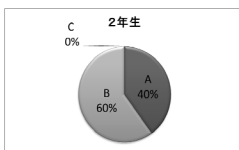
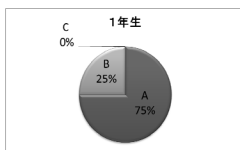
8) どこで仲良くなりましたか？

A 大学の授業やゼミ B 部活動など C アルバイト D その他



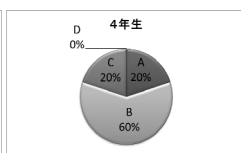
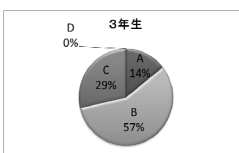
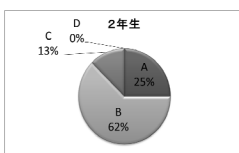
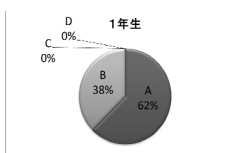
9) NO の場合：①他の国の留学生の友人が欲しいですか？

A とても欲しい B 欲しい C 欲しくない



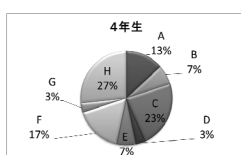
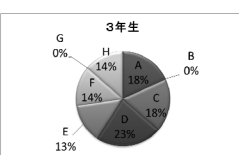
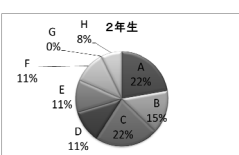
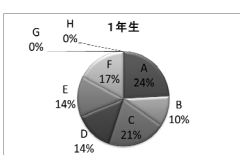
10) その理由を教えてください。(複数可)

A 外国語を勉強したい B 外国の文化や習慣を学びたい C 遊び友達に欲しい D その他

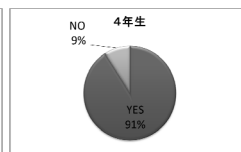
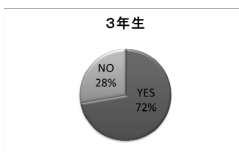
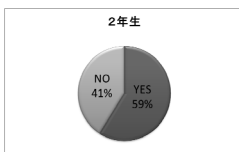
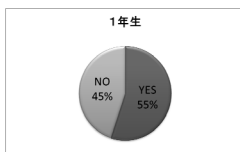


11) 大学生活をおくるにあたり困っていることを教えてください。(複数可)

A 友達ができない B アルバイトが見つからない  
 C 日本語が上手にならない D 入管や役所での手続きが難しい  
 E 学内での必要な事務手続きが難しい F 生活費が足りない  
 G その他 H 特になし

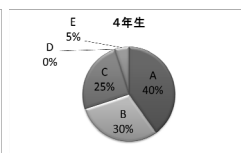
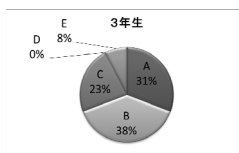
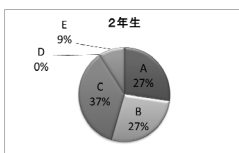
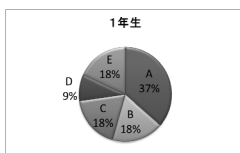


12) 国際交流クラブについて知っていますか？ YES ・ NO

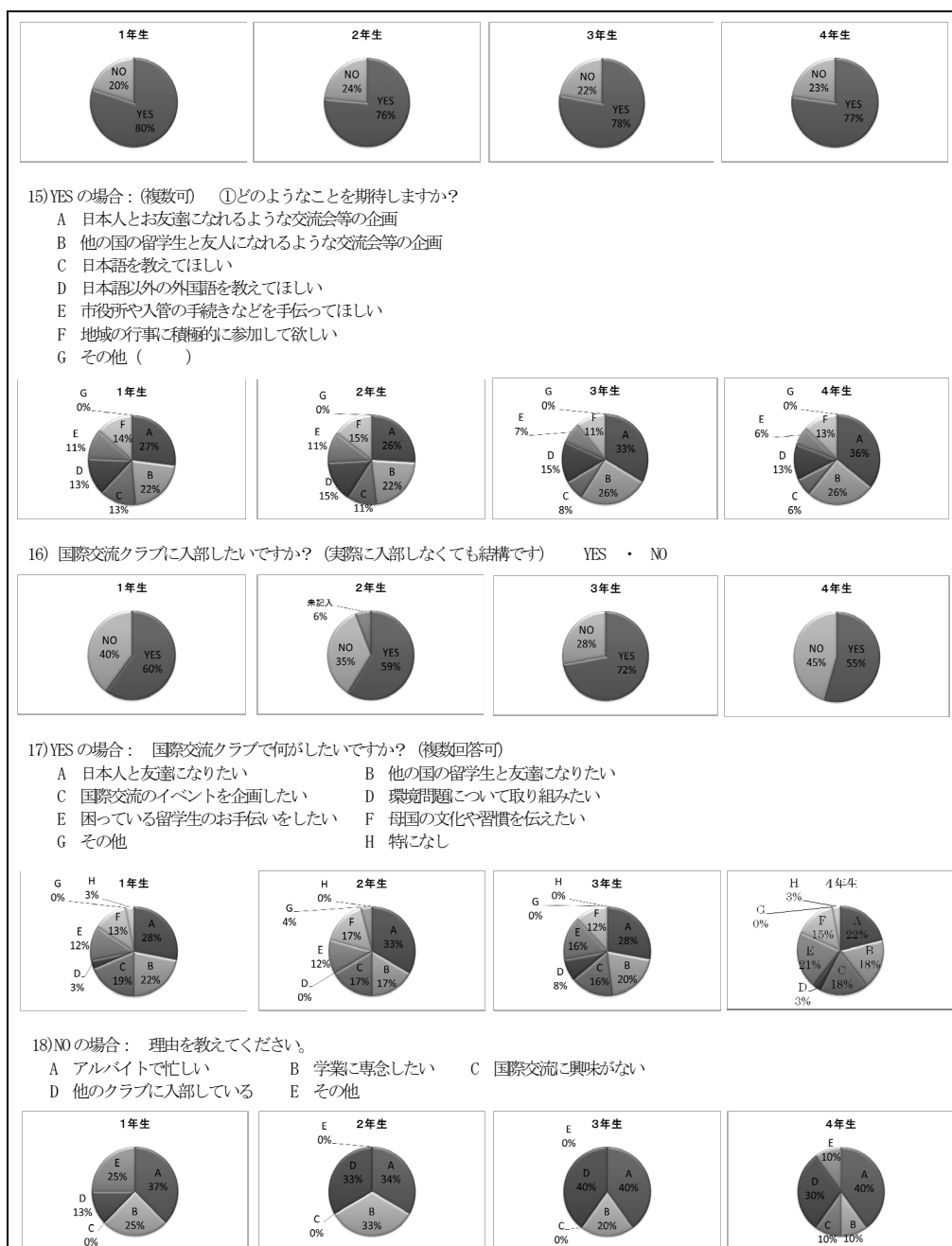


13) YES の場合：①国際交流クラブは留学生と日本人学生にとって必要な部活であると感じますか？

A とても必要 B 必要 C まあまあ必要 D 不必要 E わからない



14) 国際交流クラブに対して期待することはありますか？ YES ・ NO

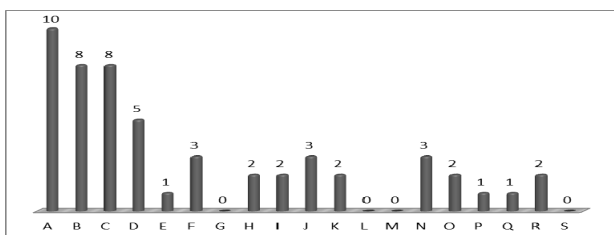


(表 13) 国際交流クラブ所属学生へのアンケート調査

1) 国際交流クラブに入部する前に、WAI に期待したことは可ですか？—②との比較です— (複数回答可)

- A 他の国の友人を作りたい B 様々な国の文化や習慣を知りたい  
 C 国際交流・国際協力に取り組みたい D 海外の文化や習慣に適応できる人間になりたい

- E 環境問題に取り組みたい F 地域の人と交流をしたい  
 G 行政関係者との交流をしたい H 国際交流・国際協力団体関係者との交流をしたい  
 I 国際的センスを身につけたい J 日本語（外国語）を上達させたい  
 K 海外の友達との悩みやトラブルを共有したい L 責任感を身につけたい  
 M 企画力を身につけたい N 積極性を身につけたい  
 O 人を思いやる心を学びたい P 人前での発言力を身につけたい  
 Q プレゼンテーション能力を身につけたい R とにかく大学生活を充実させたい S その他

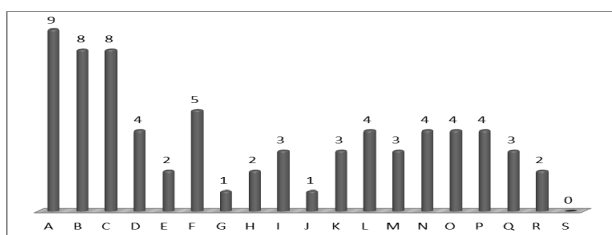


(単位：人)

## 2) 実際にWAIに入部して良かったことはありますか? YES ・ NO

YES の場合（複数回答可）

- A 他の国の友人ができた B 様々な国の文化や習慣を知ることができた  
 C 国際交流・国際協力に関心が持てた D 海外の文化や習慣に適応できる人間になった  
 E 環境問題に関心が持てた F 地域の人との交流ができた  
 G 行政関係者との交流ができた H 国際交流・国際協力団体関係者との交流ができた  
 I 国際的センスが身についた J 日本語（外国語）が上達した  
 K 海外の友達との悩みやトラブルを共有できた L 責任感が身についた  
 M 企画力が身についた N 積極性が身についた  
 O 人を思いやる心を学んだ P 人前での発言力がついた  
 Q プレゼンテーションの能力があがった R とにかく大学生活が充実したものになった S その他

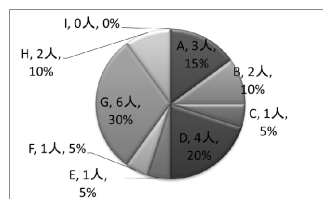


(単位：人)

## 3) WAI の活動で特に興味のある（あった）ことはありますか? YES ・ NO

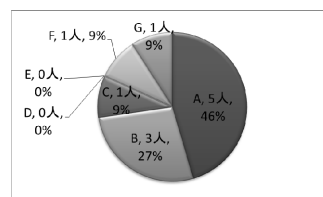
YES の場合（複数回答可）

- A 日本人とお友達になれるような交流会  
 B 母語を教える  
 C 留学生が必要な市役所や入管の手続きなどの手伝い  
 D 地域の行事への積極的な参加  
 E 環境問題への取り組み  
 F 留学生が抱えるトラブルの相談や対応  
 G 他の国の学生と（日本人を除く）友人になれるような交流会など  
 H 母国の文化や習慣を伝えられるような学習の機会  
 I その他

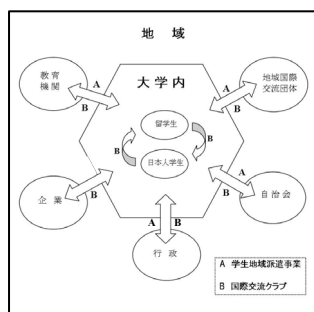


4) WAI クラブの行事に参加するために弊害となっている(なった)ことは何ですか? (複数回答可)

- A アルバイト
- B 他のクラブ活動
- C 個人的な悩みやトラブル
- D 人間関係
- E 日本語(外国語)能力
- F 異なる文化や習慣への戸惑い
- G その他



(表 14) 国際交流クラブ との地域との係わり



(表 15) 学生交流が地域・大学、そして留学生自身にもたらす効果 一例

- [留学生]
  - 精神的孤独の解消
  - 社会的孤独の解消
  - 日本社会・日本文化などの学習 など
- [地域]
  - 国際理解・留学生理解
  - 多様性を強みとした地域社会の実現と経済効果
  - 日本人・その他の外国人との共生への架け橋 など
- [大学]
  - 学生・地域への教育現場の提供
  - 大学の高感度・知名度の上昇
  - 国際理解・留学生理解を通じての地域貢献 など

## 注

- (1) Foreign Student Advisor (留学生アドバイザー) の略
- (2) ゲーリーアルセン(1999)「留学生アドバイザーという仕事」東海大学出版会, P58-P59

## 一参考文献一

- (1) ゲーリーアルセン(1999)「留学生アドバイザーという仕事」東海大学出版会
- (2) 鈴鹿国際大学国際交流センター (2006)「グローバルスタディー報告書 2000～20005」早川印刷
- (3) 瀬戸一郎 川村千鶴子 編著 (2002)「多文化教育を拓くーマルチカルチュラルな日本の現実のなかでー多文化主義と多文化教育の課題」明石書店
- (4) 日本学生支援機構 (2010)「平成 21 年度外国人留学生在籍状況調査」[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data09.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html)
- (5) 広島市立大学国際学部国際社会研究会 編 (2010)「多文化・共生・グローバル化」ミネルヴァ書房
- (6) 船津秀樹 (2007)「地域経済統合の進展と学生の国際間移動」北海道大学
- (7) 文部科学省高等教育局 学生・留学生課留学生交流室 (2010)「平成 21 年度 留学生交流総合推進会議 報告書」
- (8) 横田雅弘ほか (2007)「留学生交流の将来予測に関する調査研究」一橋大学 留学生センター・留学生課
- (9) 吉富志津代 (2008)「多文化共生社会と外国人コミュニティの力」現代人文社
- (10) 渡邊優生 (2010)「留学生教育・交流の現状と多文化共生への可能性」鈴鹿国際大学紀要 No. 17